

天才の筋

karinomaki

愛が紡ぐ宝物

愛が紡ぐ宝物

この著書で、私は一本のラインを書きたいと思っています。そのラインを「天才の筋」と表現してみました。

そのラインは、誰でも持っています。そして、愛によって紡がれるものと言えます。人生の宝なのです。

私が何かを書く時、軸になっている気持ちは、人生の宝を紡ぐ気持ちです。私は人生の宝を作りたいと思う時、持っているペンと、向かっている紙に、大きな力を感じます。そして、まるで糸を紡いでいるような気持ちになります。私は書くことを愛しているのです。そして、書いたものが哲学になる瞬間を、愛しているのです。

この著書は哲学と言えないかもしれませんが、中に表現している「筋」は、カントの純粋理性批判、実践理性批判、判断力批判という、三つの批判書を貫いている筋であると思っています。カントの著書を詳しく分析してはいませんが、大まかにカントの批判書について、心でとらえることを念頭において書いてみました。

コレクター

私は少し変わった子供でした。買い物に連れて行かれる度に、ある物に執着しました。それは、ハンカチです。子供はお人形や、おもちゃを欲しがりますが、私はいつも両親に、ハンカチを買ってほしいと言いました。母親は、父親に言いました。「この子は少しおかしいこだわりを持っているから、やめさせないといけません。次からハンカチ売り場の前を通らないようにしましょう。」

しかし、私の父親は言いました。「いや、きつとこれには深いわけがあるんだ。おそらくこの子はハンカチの柄を自分で選んで、アートとして収集しているんだ。絵を集めるのと同じなのだよ。この子はこんなに小さいけど芸術を知っているに違いない。」

私の父親はとても賢い人だったようです。

しかし、物心ついたころ、父親も、戸惑うような性癖を私は見せ始めました。

オカルト趣味

それは、オカルト趣味でした。父親にもわからないのですが、私は物心つくとき、恐ろしい絵や、ホラーを好むようになり、趣味というには度をこえていました。父親は母親に言いました。「この子はやっぱり君の言うように変わっている。何か他に気を向けさせることはできないか。」母親は言いました。「それなら、ピアノを習わせましょう。」

こうして、私はピアノを習い始めました。私は優秀ではありませんでしたが、ピアノを気に入って毎日練習するようになり、オカルトへの執着も薄れていきました。

そして数年がたち、私はピアノの前で、ある発見をしたのです。ピアノを弾いていると、何かが体をスーッと貫いているのです。背中に、腕に、指先に。まるで天からの筋のようだと私は思いました。「今までどうして気がつかなかったのだろう。」と考えて、私ははっとしました。「そうだ。ずっと小さい時、ハンカチを見ていた時、この感覚があった。何か美しいものが、感情が、天から降りてきているのだ。その感情を知りたくて、恐ろしいものを見て探っていたのだ。でも、恐ろしいとは全く違う。美しい感情なのだ。」

判断力批判

私は、どうしてこのような美しいものが体を貫くのか知りたくなりました。そして、父に聞いてみました。

「お父さん、ピアノを弾いている時の心を説明している本ってあるかな。」

父は言いました。「芸術について書いている素晴らしい本があるよ。判断力批判と言うんだ。でも今のお前にはまだ難しすぎるだろう。大学に入った頃くらいに、読んでみなさい。」

私は言いました。「もう高校生です。きっと読めます。」

しかし、父に本を借りてみて、どんなに頑張っても、判断力批判は私には難しいのでした。悔しかったので、私は、その日から猛勉強を始めました。

判断力批判は大人になってから読んでも、やはり私には難しい本でした。しかし、私は何回も読み、意味を探っていきました。判断力批判は大まかに言えば、芸術と自然について書いた本でした。私が判断力批判を理解しようと努めて、なんとなくつかんだこと・・・それは、この世界で、天才と言われる仕事をすることの神秘でした。判断力批判がどうして難しいか・・・それは、この世が何かによって、がんじがらめになっていて、芸術が成立しにくいからだ、私はなんとなくつかんだのです。判断力批判の著者のカントは、芸術家を天才と書いています。しかし、天才について分析するのはたいへん困難なようです。

「どうしてだろう・・・なにが邪魔しているのだろう・・・確かにピアノを弾いていたころは、私の心に空は近かった。突き抜けるような爽快感があった。私はピアノをやめてから、長い間それを感じていない。」

私は、知識を積み上げるだけでは、天才にはなれないことがはっきりわかったのです。

私は思いました。「私がハンカチを集めていたころから本当に欲しかったものがやっとわかった。私は、天才の持っている筋が欲しい。そのために、私はいつか小説を書いてみよう。それも、空から人の世界を見下ろす視点のものを・・・。」

天才の謎

私は、天才の筋が欲しいと思いました。それは、私が子供の頃から、気づかないうちに持っていた気持ちなのです。私だけではなく、人間ならだれでも根底に持っている気持ちかもしれません。この気持ちを持っているだけで、人は「神聖」という言葉を心から理解していると言えます。しかし、いつしか人は、この気持ちを忘れ、もっと確かな支えが欲しくなります。なぜならば、神聖という言葉の本当の意味を知り、天才の筋を求めていくことは、自分が築き上げたものの上に決して乗らない、地味な生き方をすることだからです。私は、ハンカチを集めるコレクターでした。それは、私が、集めることにこだわったからではなく、美しいハンカチの柄を見て、心が一つにまとまるという「快感」を感じるためでした。もし、何かを集めることが、物欲でしかないのなら、やはりそれは、自分が築いたものの上に乗ることです。しかし、私はハンカチの向こうに、何かを見ていました。その何かとは、「美しい」と思う感情のもっと向こうにあるものです。その「何か」が、この世界でばらばらになりがちな心を、美しくまとめるものです。その力は、神が心に降臨するかのような「神聖」なものです。「何か」とは、いったい何でしょうか。美しさの向こうには何があるのでしょうか。それを突き止めていこうとする人こそ、「天才の筋」を持つ天才なのです。「何か」を、「神」と断言してしまえば、哲学は必要なくなってしまう。答えがわかっていることを議論する必要がなくなるからです。しかし、哲学者は考え続けます。

アンチノミー

子供の頃にあんなに美しいと思っていた空が、きれいにみえなくなった・・・そんな経験を大人はします。それは、大人の世界の言訳や建前が、心と空をさえぎっているからです。そんな中、ずっと美しい目を持ち続ける人がいます。それこそが天才です。天才の筋を得るために最も大切なことは、自分が築いたものの上に乗ったり、しがみついたりしないことだと思います。それはなぜでしょうか。カントの哲学からそのことを読み取ってみようと思います。

カントが「三大批判書」と言われる純粋理性批判、実践理性批判、判断力批判を書いた動機の一つに、「アンチノミー」（二律背反）の発見があると思われます。アンチノミーとは、大まかに言えば、人間の頭で解き明かすことができない矛盾の発見です。カントはアンチノミーを発見して、人間の無力さを感じ、謙虚さというものの大切さを深く考えたはずです。

なぜアンチノミーは存在するのでしょうか。

それは人間の頭や力が万能ではないことを認識し、常に謙虚である必要があるからだと思われるのです。もっと言えば、人間に弱いところや泣き所があることを自覚する必要があるのです。それは、人生の作品（それぞれの生き方）は、謙虚であればあるほど素晴らしいからなのです。

カントも、人間には越えられない壁（アンチノミー）があることが、実は大切なことであることを自覚していたに違いないのです。

人間は謙虚であればあるほど、心が自由です。自分は素晴らしいと思すぎない方がいいのです。なぜなら、心が小さいと自分で思っていることが、実は心を柔らかくし、心を、なんでも吸収する受容体になっているからなのです。自分の足りなさを自覚していないと、天からの力を降らせることができないのですね。

謙虚さが、空の美しさと美しい目線を作ります。そして、いつまでも空を美しいと思い続け、きれいな心を持ち続けることが天才の筋を作るのです。その筋は見栄も言訳も建前も打破して天地を貫くのです。

スタート地点

天才は、何かを創り出す人です。どうして創らねばならないのでしょうか。それは、天とつながるためです。もちろん、天とつながるためには地がスタート地点と普通は思います。でも、実際は地よりももっと深い底から始めなければなりません。痛みが本当の、天才のスタート地点なのです。

大切なものを作ると失うことが怖く、あえて大切なものを作らないという人がいます。私は以前、つらいことがあって、やけになって、書いていた日記を全部燃やしたことがあります。そして冷静になって私が後悔したかという、そんなことはありませんでした。私が次に何をしたかという、真っ白な紙に、文章を書き始めました。その文章は、私が生まれて初めて書いた、日記以外のきちんとした文章でした。それは、私が心の空白を埋めるために書かれたものであったからこそ、私にとって宝物になったのではないかと、今思うのです。苦しみや空虚な気持ちを埋めようとして、私は宝を必死で引き寄せたのです。

誰にも、突かれたら困る泣き所があります。私はその泣き所を突かれてやけになって、あえて大切なものを全て捨てようとする傾向があります。私はつらい記憶を捨てようとして、日記を燃やしました。しかし、その泣き所は、持ち続けて苦しむからこそ、意味があるのかもしれない。私は日記を燃やしてつらい思い出を捨てることなく、地の底からのスタート地点にしてもよかったのかもしれない。いずれにしても、大切なものや幸せを失ったことから、私の「書く」という人生の宝が得られました。それは、マイナスからのスタートでした。私は天才の筋について書いて、少しでも天に向かって伸びていきたいのです。そして、天才に一步でも近づきたいと思います。

マイナスの意味

どの分野も、自分とどれだけ向き合ったかに大成するかどうかがかかっています。その中で自分の小ささや、醜さに改めて気がつくものです。そんな中で、自分の癖や傾向、個性をつかみ、それをどうやって補い、どう導いていくかが成功のカギです。全てはマイナスからのスタートだと私は思っています。マイナスの沼からもがいて始まってこそ最も強い柱が立てられるのだと私は思います。この世界の事物を突き抜けて、彼岸の世界の存在を感じることは、一本の柱を天に向かって立てることです。しかしそのためには苦しみを突き抜けなければなりません。哲学に限らずどのような分野の道も、苦しみと向き合って昇華させることを要請されます。昨日テレビを見ていたら、人の癖についてやっていました。傍から見たら不快な癖が、実はストレスを大きく軽減するのだそうです。人の傾向というものは、もちろんマイナスもよびますが、何かにこだわって生きることによって、大きな柱をつくるかのような、生きる道を開くことがあります。癖やマイナスは、人が成長して、自分の好きなこと（傾向）をつかむ種なのかもしれません。私の両親は放任主義で、私は悪い癖もあまり直されなかったのですが、おかげで私は個性をまったくつぶされませんでした。私は、個性が常識の枠を突き抜けていくことを、あまりマイナスだと思いません。

私の両親の場合は、私がオカルト的なものに過剰に興味を示すことを心配しましたが、私を上手に導いてくれました。

苦しみと謙虚さ

天才が持つ、マイナスからのスタート地点は、大人が持っでしまいがちな、「建前」を打破し、美しい目を保つためのものです。自分には生きる苦しみがある・・・ということが、心のおごりを覚ましてくれるのです。そして、意外なことにこのマイナスが、天上につらぬく「天才の筋」の地での姿なのです。自分は苦しいと自覚することが、天才に必要な謙虚さを育ててくれるのです。神はきっと心のおごりが最も濁って見えているのではないのでしょうか。神は心の美しい人に天才の筋をプレゼントするはずでず。

カントという哲学者は、自身の著書に「批判」というタイトルをつけましたが、「批判」は、自分の足元をかえりみるという意味を含むように私は思うのです。

いくら実績を積み上げても、自分の足元がグラグラである生きる危うさを、自分につきまとう「マイナス」の痛みによって自覚しないと、その実績ははりぼてと同じになってしまいます。マイナスは不思議なことに、最も心を純粹にする薬であり、最も地を固めてくれる土台なのです。きっと痛みを知っている人は他人を傷つけないはずでず。そして誰よりも自分の仕事を地道に積み上げるはずでず。

私は最初、自分へのプライドから判断力批判を読もうとしました。しかし、それだけではしっかり読めないことに気がつきました。私はその著書からカントの天才性だけを感じとり、昔ピアノを弾いた時の感覚を思い出したのです。何のプライドも持たず、純粹だった頃の・・・。小さい頃はきっとみんな天才なのかもしれません。

魔法のハンカチ

実は、痛み、苦しみというマイナスをまとめあげ、美しさへとまっすぐ導く魔法があるのです。それこそが、私がハンカチの向こうに見ていたものです。

悲しい時、つらい時には心に「痛みのナイフ」が刺さっています。このナイフと上手に向き合うことで、最も美しい神聖な世界への架け橋（天才の筋）を作ることができるのです。

心が痛い時、大切なことは、ナイフを無理に引き抜くことではありません。そのナイフを優しく包んで心を天へと導く魔法のハンカチがあるのです。

そのハンカチとは、自分が最もやりたいこと・・・つまり「生きがい」です。痛みを自分が選んだ道の力に結び、昇華させれば、心は癒され、この道の向上のために自分は痛かったのだと、心から納得することができるのです。その時、痛みのナイフは魔法のハンカチで包まれ、天への道を切り開く大きな武器に生まれ変わっているのです。心が痛い時、何かに打ち込むと、その痛みは不思議なことにばらばらな心を一つにまとめてくれる引力になってくれるのです。その時、天才の筋ができています。

私がオカルト趣味に走っていたのは、それに興味があるからではなく、生きることを痛いと感じ、その痛みにおぼれようとしたからでした。私は子供のころに大切にしていたハンカチへの気持ちを思い出そうとしました。魔法と現実は違うのかもしれませんが・・・。

正しい城

天才の筋による作品は、苦しみを昇華してできたものです。だから、人を感動させ、見る人に心が洗われるような感動をもたらすのです。その作品は痛みから始まって天の力を仰いで創られたからこそ、痛みを癒す力を天から授かって心（原点）へと降り注ぐのでしょう。美しい音楽や絵や詩によって心の傷が本当に癒されるのです。カントは本当の天才を、芸術家だと言っています。それは、芸術がより人の心を打つことが多いからでしょう。

プライドや自己満足は、間違っただけに人の心を閉じ込めることになります。いつも心を柔らかく自由に保つには、心がいつも地に根ざしていなければなりません。

そのために人は苦しみの地上の生まれたのだと思います。正しい城を築き続けるために、私も、何かを創っても、それには乗らず、地に足をつけていきたいのです。私も天才の筋が欲しいので……。

私は、プライドのために判断力批判を読もうとした自分を反省し、自分の力で何かを創ってみようと思いました。それこそが正しい城を理解することだと思いました。自分の心で何かを考えることこそ、地に足をつけて生きることだと気づいたのです。そして、創り続けるためには、一つ創る度に、創ったものを空に飛ばして、爽やかな気持ちでいるべきことを、私はもう知っていました。私は子供の頃に、ただ目の前のピアノに向かって座っていた時の自由な気持ちを忘れていなかったのです。最後に私が創った短編を載せておきます。

空の神

私は空の神。いつも地上の天才を探して、力を降らせる仕事をしている。

ある時、いつも庭で一人で遊んでいる小さな女の子を見つけた。その子は空を見上げてにっこり笑って私と目が合った。なにか、普通の笑いではない。「してやったり」というような、勇ましい笑い方だった……。

この子は、何か大切な心の宝を持っているのではないか……

私はそう直観したのである。それ以来、その子が何をして遊んでいるのか観察することが私の日課になった。

その子は、自分ではもちろんわかっていないだろうが、人が生まれてきた意味を心からわかっているようだった。雑草をはちに植えて育てたり、穴を掘って「冷蔵庫」に見立てて草を入れて保存したり、一見何のことはないおままごとをしているのだが、自然の中で生の意味、営みを探る……という、大切なことに、あらゆる遊びがつながっている。そのことを知っていることにより、いつしか何かを創り出す力が生まれていくのだ。このまま大人になれば、この子は天才になるかもしれない。子供はみんなそうなのかもしれないが。

その子はやがて学校に入った。しかし、困ったことになった。その子は大変頭がよく、みんなに一目置かれていくうちに、うぬぼれて鼻持ちならない性格になっていったのだ。

このままでは、せっかく持っている天性の性格が破壊されてしまうだろう。しかし、私は神であり、目に見える形でこの子を助けることができないのだ……。

その子は大学受験をむかえた。そして初めて挫折を味わった。どういうわけか勉強が手につかなくなってきたのだ。自分は秀才であるという、たった一つのプライドは砕かれ、その子は受験をやめてしまった。親に非難され、友達に追い越され、くずれかけの心でその子は空を見上げた。ちょうど夕日がきれいにさしていた。

涙が流れた。夕日が、明日が必ず来ることを教えていた……。

私が見守っていた大切な子は、やはり天才だった。その子は思った。「自分が何者でもない、ただ生まれてきて夕陽に照らされる小さな人間であることが、それを心からわかることが、どんな道にも進める強さを作る。プライドも何もなく、ただ自然を美しいと思う気持ちだけが、いつしか天につながる道を作る。」

そしてにこっと笑った。同じだと私は思った。子供の頃に空から見つけたそのほほえみ。その一人の天才は、神への道を見つけた。天才の筋は、子供の頃の濁りのない純粹さを、人生の痛みを知り、痛みとともに取り戻すことだった。